エンディング産業展（ENDEX）における
アンケート調査報告

葬送儀礼における宗教性について（後編）

総合研究所では、葬送儀礼に関する研究の一環として、２０１７（平成29）年度に続き、２０１８年度のエンディング産業展（主催：TSO International　通称：ENDEX）においても、主催者との共催で、アンケートと聞き取り調査を実施しました。２回目となる今回は、よりよい葬儀を具体的に模索するため、アンケートのテーマを「葬送儀礼における宗教性」としました。８月号に続き、今号ではアンケート後半の結果について報告します。

まずアンケートの実施要領と回収数は次の通りです。

〈実施機会Ⅰ〉
日　時：２０１８（平成30）年
　　８月22日～24日
場　所：エンディング産業展２０１８
　　（東京ビッグサイト）

〈実施機会Ⅱ〉
日　時：２０１８（平成30）年
　　11月14日～16日
場　所：関西エンディング産業展２０１８（インテックス大阪）

回収数：２００６件（前述Ⅰ・Ⅱ合算）
（回答者区分内訳）
エンディング産業関連業者：１００９件
宗教者：２３Ⅰ件
一般来場者：５２５件
その他・不明（無回答）：２４１件

それでは、前回同様に以下にその結果と、そこから読み取れる主なものについて報告したいと思います。

なお本文中、アンケート結果の具体的な数値は、論を進めるうえで必要なものに限り記載しております。その他に関しては、図表を併載しておきますので、そちらをご参照ください。

◆問7　あなたは、時間の都合で葬儀の一部を省略することをどう思いますか？（1つのみ○印）

◆問8　あなたは、式中初七日（繰り上げ初七日）についてどう思いますか？（1つのみ○印）

これら2つの設問に対する結果は、儀式の一部省略や式中初七日（繰り上げ初七日）が、世の流れとして、もはや抗えないものとなっていることを示しています。

しかも、宗教者でさえ「すべきでない」と考える人が3割にも満たない、という現状は、宗教者の妥協としても指摘されるでしょうが、むしろ宗教者個人で対応しうる段階ではなく、宗派や教団という宗教界全体として、葬儀業界の主導となっている葬送文化のあり方に、一石を投じることが求められている、といっても過言ではないでしょう。

◆問9　あなたの周りで、習俗的なことがら（棺を回す、茶碗を割る、末期の水、清め塩など）は、今日でも行われていますか？（1つのみ○印）

本設問の結果からは、葬儀における習俗的な内容は、全体として減少傾向にある、といってよいでしょう。ただし、「ない」と言い切る割合は、宗教者において34・3％と、業者（17・7％）や一般（23・2％）に比べて高い結果となっています。

ここで注意したいのは、「わからない」と答えている一般の割合が17・5％と、業者や宗教者より10％以上高い数値を示している点です。この結果は、ひとつに葬儀が、地域共同体による協業から葬儀社によるサービスへと変化したことによる、と考えられます。その意味で宗教者としては、今後ますます葬儀社との関係が重要になってくるといえるでしょう。

◆問10　あなたは、遺族として葬儀で何がしたいですか（いくつでも○印）

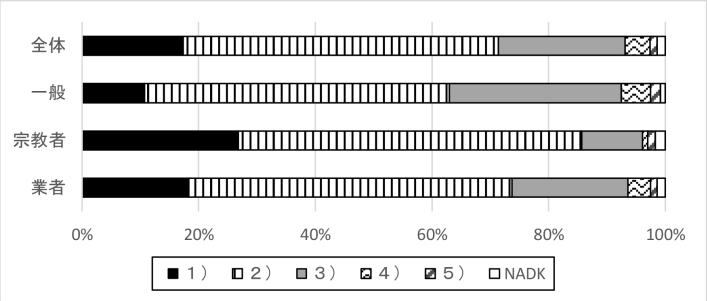
◆問11　あなたは、会葬者として葬儀で何がしたいですか（いくつでも○印）

これら2つの設問の結果から、全体として、葬儀には、まずもって「故人を偲ぶ」場であることが求められている、といってよいでしょう。確かに、葬儀とは、人の死を契機として行われる儀礼であるため、人の心理として、このような結果は至極当然といえます。

そして、宗教者においては「一緒に読経する」という宗教儀式の行為を、その次に重視しています。対して、葬儀業界や一般の人々においては、同じ宗教儀式の行為でも重視しているのは焼香であり、また「一緒に読経」よりも、会葬者は遺族に対して声をかけ、遺族は会葬者に謝意を示すという、人と人との交わ

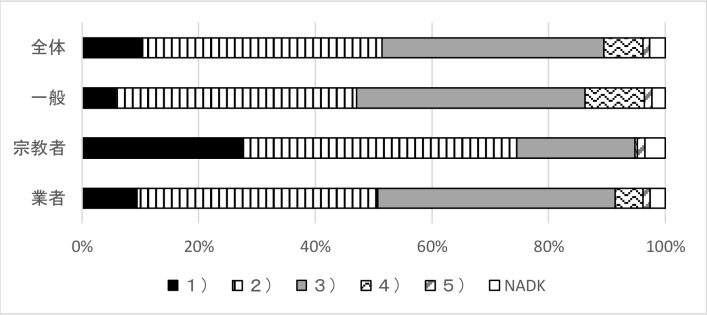
問７．あなたは、時間の都合で葬儀の一部を省略することをどう思いますか（１つのみ〇印）

	業者（構成比）	宗教者（構成比）	一般（構成比）	全体（構成比）
１）すべきでない	185（18.3%）	62（26.8%）	56（10.7%）	347（17.3%）
２）状況次第	559（55.4%）	136（58.9%）	275（52.3%）	1084（54.1%）
３）かまわない	201（19.9%）	24（10.4%）	155（29.5%）	436（21.7%）
４）わからない	39（3.9%）	2（0.9%）	26（5.0%）	87（4.3%）
５）その他	11（1.1%）	3（1.3%）	9（1.7%）	24（1.2%）
NADK	14（1.4%）	4（1.7%）	4（0.8%）	28（1.4%）
計	1009（100.0%）	231（100.0%）	525（100.0%）	2006（100.0%）



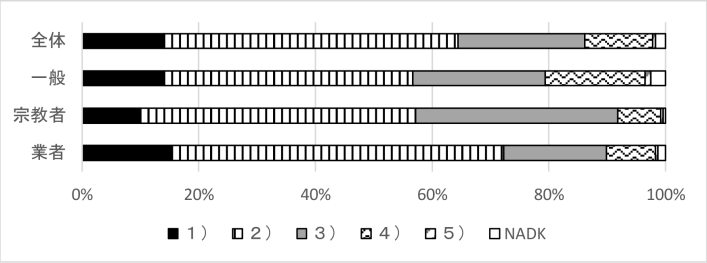
問８．あなたは、式中初七日（繰り上げ初七日）についてどう思いますか（１つのみ〇印）

	業者（構成比）	宗教者（構成比）	一般（構成比）	全体（構成比）
１）すべきでない	95（9.4%）	64（27.7%）	30（5.7%）	208（10.4%）
２）状況次第	417（41.3%）	108（46.8%）	217（41.3%）	822（41.0%）
３）かまわない	411（40.7%）	47（20.3%）	206（39.2%）	764（38.1%）
４）わからない	48（4.8%）	1（0.4%）	53（10.1%）	135（6.7%）
５）その他	12（1.2%）	3（1.3%）	7（1.3%）	23（1.1%）
NADK	26（2.6%）	8（3.5%）	12（2.3%）	54（2.7%）
計	1009（100.0%）	231（100.0%）	525（100.0%）	2006（100.0%）



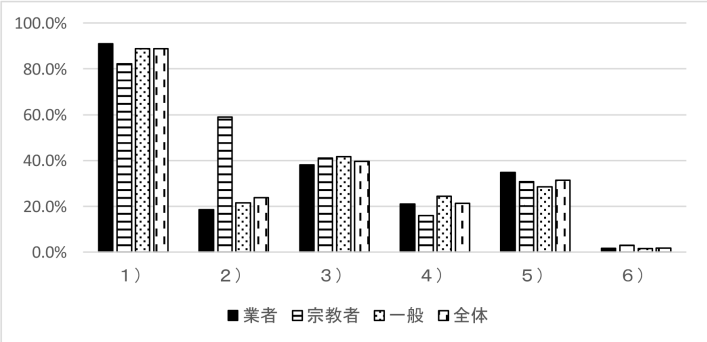
問９．あなたの周りで、習俗的なことがら（棺を回す、茶碗を割る、末期の水、浄め塩など）は、今日でも行われていますか（１つのみ〇印）

	業者（構成比）	宗教者（構成比）	一般（構成比）	全体（構成比）
１）以前と同程度に行われている	155（15.4%）	23（10.0%）	74（14.1%）	281（14.0%）
２）減少傾向にある	574（56.9%）	109（47.2%）	224（42.6%）	1010（50.4%）
３）ない	178（17.6%）	80（34.6%）	119（22.7%）	438（21.8%）
４）わからない	85（8.4%）	17（7.4%）	90（17.1%）	232（11.6%）
５）その他	4（0.4%）	1（0.4%）	5（1.0%）	10（0.5%）
NADK	13（1.3%）	1（0.4%）	13（2.5%）	35（1.7%）
計	1009（100.0%）	231（100.0%）	525（100.0%）	2006（100.0%）



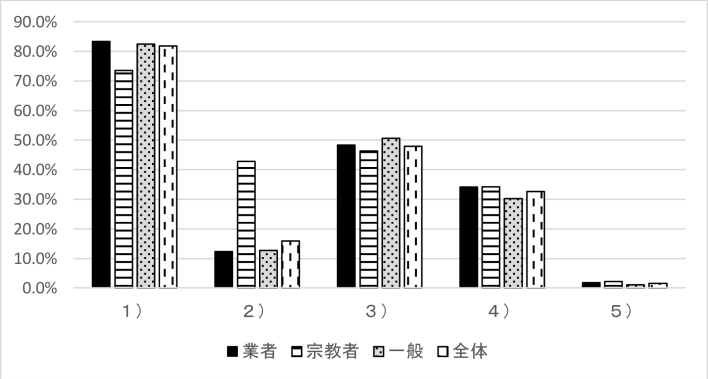
問 10．あなたは、遺族として葬儀で何がしたいですか（いくつでも〇印）

	業者（比率）	宗教者（比率）	一般（比率）	全体（比率）
１）故人を偲ぶ	918（91.0%）	190（82.3%）	466（88.8%）	1784（88.9%）
２）一緒に読経	186（18.4%）	136（58.9%）	113（21.5%）	475（23.7%）
３）焼香	384（38.1%）	95（41.1%）	219（41.7%）	794（39.6%）
４）会葬者への立礼	212（21.0%）	37（16.0%）	128（24.4%）	428（21.3%）
５）会葬者への挨拶	350（34.7%）	71（30.7%）	149（28.4%）	630（31.4%）
６）その他	16（1.6%）	7（3.0%）	8（1.5%）	34（1.7%）



問 11. あなたは、会葬者として葬儀で何がしたいですか（いくつでも○印）

	業者（比率）	宗教者（比率）	一般（比率）	全体（比率）
1）故人を偲ぶ	842（83.4%）	170（73.6%）	433（82.5%）	1642（81.9%）
2）一緒に読経	125（12.4%）	99（42.9%）	67（12.8%）	319（15.9%）
3）焼香	487（48.3%）	107（46.3%）	266（50.7%）	961（47.9%）
4）遺族への声かけ	344（34.1%）	79（34.2%）	159（30.3%）	653（32.6%）
5）その他	18（1.8%）	5（2.2%）	6（1.1%）	31（1.5%）



問 12. あなたが経験した葬儀で、無意味だと感じたことを教えてください（自由記述）

〔自由記述につき省略〕

り、つまり社会的な役割を葬儀においては重視している、という傾向が見て取れます。

こうした意識のズレは、葬儀という場で具体的な形になると、遺族や会葬者の期待を裏切ることになり、宗教（者）に対する不満や失望感につながる可能性が考えられます。

◆問12　あなたが経験した葬儀で、無意味だと感じたことを教えてください（自由記述）

この設問に対しては、自由記述であったためか、回答（記入）は少なかったのですが、それでも多岐にわたっています。

そのなかでも多くを占めていたのは、法話に関するものでした。ただし、それらの回答も、法話そのものを否定するものではなく、質（内容や話し方）や時間的な長さ（長いまたは短い）など、法話

として機能していないことを指摘するものです。換言すれば、それだけ法話に対する期待（需要）があるということでしょう。

◆問13　当事者（遺族・会葬者）として経験した直近（3年以内）の葬儀は、あなたにとって宗教的な体験と思えるものでしたか（1つのみ○印）

この設問に対しては、業者と一般において、それぞれ「いいえ」の回答が、24・0％、25・9％となっています。まずは、この厳しい結果自体を真摯に受け止めなければならないでしょう。

ただ、このこと自体も大きな課題ですが、その解決を模索するときに注意すべき点としては、宗教者による「いいえ」が、8・7％に過ぎないことがあげられます。つまり同じ葬儀にあっても、宗教者とそれ以外では「宗教的」と感じるか否かに、何等かの差がある（それがクオリティに起因するものであるのか、「宗教的」という語に対する理解の差であるかは、さらに詳細な調査が必要ですが）と考えられます。その意味では、宗教者の思いだけでは、正しい解決は難しいかもしれません。

◆問14　最後に、あなたは、全体として葬儀に宗教はどの程度必要だと思いますか？（該当する番号に○印［4段階評価で1～4のいずれかに○印］）

葬儀に関する諸問題について考えていただいた上で回答いただくため、本設問は、本アンケートの最後に配しました。4段階評価での結果は、全体として、4または3が過半数を占めていますが、そのなかでも3の割合が、業者や一般では約4割を占めている（宗教者では4が8割近く）こと、さらには本アンケートそのものが「浄土真宗本願寺派総合研究所」と記された場所で行われたことに鑑みると、決して楽観はできないでしょう。

＊　＊　＊

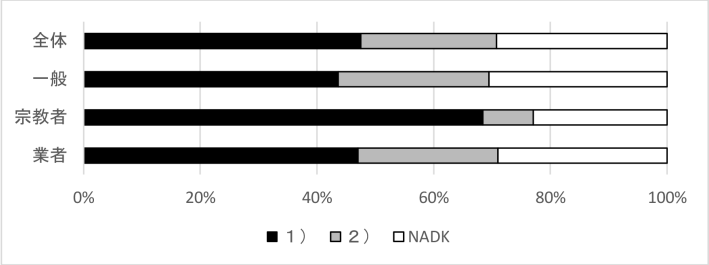
今日の葬儀をめぐる課題は、本アンケートの結果からもお分かりいただけるように、多面的なものとなっています。そして、そのなかでも私たち宗門人にとって一番大きな課題は、宗教者と、業者や一般との間に「意識のズレ」が生じていることではないでしょうか。

かつての日本社会には、地域共同体を中心に「葬儀とはこういうもの」という通念がありました。そのため、葬儀は伝統的なあり方（儀式だけでなく葬送期間のさまざまな事柄についての）に倣うことで機能してきました。だからこそ今日でも、ご法義地であれば、まだまだ従来の葬儀のあり方が喜ばれています。

しかし社会の情報化と地域コミュニティの弱体化が進み、宗教的浮動層が増加

問 13. 当事者（遺族・会葬者）として経験した直近（３年以内）の葬儀は、あなたにとって宗教的な体験と思えるものでしたか（１つのみ〇印）

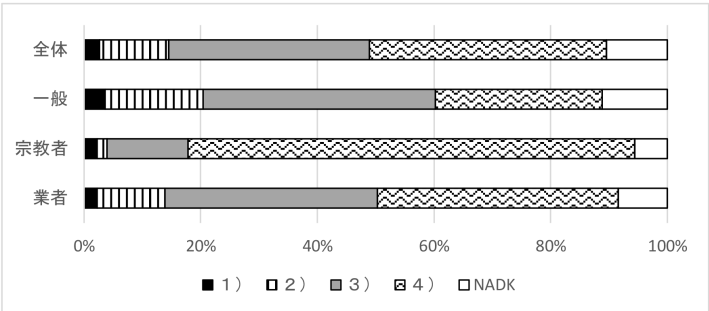
	業者（構成比）	宗教者（構成比）	一般（構成比）	全体（構成比）
１）は　い	474（47.0%）	158（68.4%）	229（43.6%）	953（47.5%）
２）いいえ	242（24.0%）	20（8.7%）	136（25.9%）	467（23.3%）
NADK	293（29.0%）	53（22.9%）	160（30.5%）	586（29.2%）
計	1009（100.0%）	231（100.0%）	525（100.0%）	2006（100.0%）



問 14. 最後に、あなたは、全体として葬儀に宗教はどの程度必要だと思いますか？（該当する番号に〇印）

４段階評価：１（不要）←→４（必要）

	業者（構成比）	宗教者（構成比）	一般（構成比）	全体（構成比）
1	22（2.2%）	5（2.2%）	19（3.6%）	53（2.6%）
2	118（11.7%）	4（1.7%）	88（16.8%）	239（11.9%）
3	367（36.4%）	32（13.9%）	209（39.8%）	690（34.4%）
4	417（41.3%）	177（76.6%）	150（28.6%）	815（40.6%）
NADK	85（8.4%）	13（5.6%）	59（11.2%）	209（10.4%）
計	1009（100.0%）	231（100.0%）	525（100.0%）	2006（100.0%）



した今日では、そうした状況を望むことは、加速度的に難しくなりつつあります。

このような現状において、社会の変化に対し、変化しない（旧態依然とした）宗教者のあり方が批判される場面は、少なくありません。確かに、社会の状況（特に変化）に目を向け、社会的な感覚をアップデート（更新）することも大切でしょう。

しかし一方で、感覚のズレが形となって表れる背景には、大切なものを守ろうとする宗教者の想いもあります。

例えば、看取（みとり）の期間が長くなっている今日では、葬儀の段階で遺族がある程度「大切な人の死」に納得できている場合、遺されたものとしては、初七日以降の仏事の必要性が感じられず、省略される傾向にあります（これは葬儀のグリーフ・ケアという機能からみた場合で、経済面や時間の調整など、それ以外の理由もあります）。それに対し宗教者が、初七日以降の仏事を奨励するのは、大切な人の死を遺された者の仏縁とする機会として、大切に考えているからです。

時代的な変化に対し、何もしないのも問題ですが、同時に、社会の変化に応じて迎合（げいごう）するだけでは、大切なものも失われてしまいます。このように今日の宗教者は、大切なものを守りながら、時代的な変化への対応が求められる、厳しい状況に置かれている、といわざるをえません。

しかしそのような現状であるからこそ、少しでも良い葬儀となるために宗教者としては、まずはそうした「意識のズレ」をしっかりと認識することからはじめ、これからの葬儀に臨みたいものである、と改めて考えさせられました。

（浄土真宗本願寺派総合研究所
仏教音楽・儀礼研究室長　福本康之）